

立命館大学アート・リサーチセンター  
 文部科学省 国際共同利用・共同研究拠点  
 「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」  
 2020年度 国際共同研究成果報告書〔研究設備・資源活用型〕

2021年5月8日 提出

1. 研究課題名	
全国高地性集落に関するデジタル資料化およびデータベース化プロジェクト (英文課題名: Digital documentation and database compilation project on national upland settlements)	
2. 研究代表者	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
森岡秀人(もりおかひでと)	(公財)古代学協会 客員研究員
3. 研究分担者 (合計: 10名)	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
桑原久男(くわばらひさお)	天理大学教授
國下多美樹(くにしたたみき)	龍谷大学・教授
若林邦彦(わかばやしくにひこ)	同志社大学・教授
伊藤淳史(いとうあつし)	京都大学・助教
柴田昌児(しばたしょうじ)	愛媛大学・准教授
田畑直彦(たばたなおひこ)	山口大学・助教
寺前直人(てらまえなおと)	駒澤大学・教授
森貴教(もりたかのり)	新潟大学・助教
山本亮(やまもとりょう)	東京国立博物館・研究員
宇佐美智之(うさみともゆき)	立命館大学・特任助教

## 4. 研究課題の概要(300字程度) (申請書から変更がある場合は、変更点が分かるように明記してください)

考古学上熟知されてきた高地性集落は、年代論を根幹とする歴史の大きな枠組みが破綻する中で、歴史的評価が著しく多様化し、大きな転換期を迎えている。そこで申請者らは、これまでに蓄積された調査成果・研究業績を踏まえつつ、利用可能となった新たな技術も用いながら、列島各地における高地性集落の時期、立地、遺構、遺物、分布などの実態を総合的に検討し、その歴史的性格を実証的に再評価してゆくことを構想している。この実現に向けた基礎研究として、本研究では全国各地の高地性集落について情報収集とデジタル資料化を行い、データベースを構築する。従来培われてきた考古学的手法に依りつつも、GIS やリモートセンシング(高解像度衛星画像やドローン)、3次元測量などによって遺跡情報を取得する点に特徴があり、新規性と独自性をもつ試みであるといえる。構築したデータベースについては、弥生時代研究を中心にさまざまな方面で活用できるよう、適切な形で整備・公開する。

## 5. 研究成果の概要 (この項は、本センターのホームページ・紀要等で公開することがあります)

本年度は、データベース構築にむけて、検討を行った。

## 6. 研究業績 (日本語以外に英語名称もあるものは、できるだけ日英両言語でご記入ください)

## (1) 著書

・『考古学リーダー27 弥生時代の東西交流～広域的な運動性を考える～』共著 2020.5、六一書房、西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会 編、297-313 頁

## (2) 論文

- ・「『閉鎖系』の近畿第V・VI様式一兵庫県淡路市舟木遺跡出土土器の態様の再検討から一」、単著、2020.11、『古墳出現期土器研究』第7号 古墳出現期土器研究会 83-103 頁、査読有
- ・「高地性集落と望楼施設—考古学的な建築物復元と物見櫓の必然性をめぐるコラム—」、単著、2021.3、城郭談話会、『考古資料〔遺構・遺物・層位〕から城郭建築〔作事〕に迫る—その可能性と限界を探る—』205—212 頁、査読なし

## (3) 研究発表等

## (4) 主催したシンポジウム・研究会等

- ・「弥生時代高地性集落の列島の再検証」第1回研究会、(公財)古代学協会、2020.9、28名
- ・「弥生時代高地性集落の列島の再検証」第2回研究会、(公財)古代学協会、2021.3、39名

## (5) その他研究活動(報道発表や講演会等)

## (6) 受賞学術賞

## (7) 科学研究費助成事業

- ・弥生時代高地性集落の列島の再検証、基盤研究(B)、2020年4月～2024年3月、役割(代表)
- ・松帆銅鐸発見を契機とする銅鐸論の再構築、基盤研究(B)、2018年4月～2023年3月、役割(分担)

## (8) 競争的資金等(科研費を除く)

## (9) その他